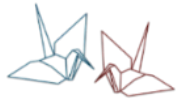




# 未来に向かって伸びる鶴嶺の子

## 鶴小だより 進級号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校  
校長 日高 大司郎  
令和8年3月25日発行



### 子どもはだれのもの？！

今年度も、1年が終わろうとしています。僕の拙い文章に、お付き合いいただいて本当にありがとうございます。卒業式のあと、何人かの保護者の皆さんから、「学校だよりを楽しみにしていました。」と過分なお言葉を頂戴しました。有り難いなあと思いました。僕は、保護者の皆さんに「伝えたい思い」があって、この文章を書いています。けれど、受け取っていただけなければ、それは書いていないのと同じことになります。受け取ってくださる方がいてくださってはじめて、僕の思いは成就するのです。本当に感謝です。いつもありがとうございます。今年度の最後の学校だよりは、先日、立派に巣立って行った卒業生に贈った言葉を掲載いたします。

令和7年度第6学年の学年目標は、「自志貫徹」でした。ぼくはこの「自志貫徹」という言葉、とても好きでした。何故なら、ここで言う「自分の志」、もっと簡単な言葉で言えば、「自分の思い」が、「幸せな人生」を送るための必要条件、言い換えれば、1番大切にしなければならぬものだと考えているからです。では「幸せな人生」のために、なぜ「自分の思い」が必要なのでしょう。

みなさんは、こんなことを言われたことがありますか。未来のために、こうしなさい。将来のためにこれをごんばっておきなさい。今の行動や今努力している事が、確実に未来をつくり、広がっていきます。だからまわりの大人は、みなさんの幸せを願ってそう言うのです。しかし、それが苦しい我慢ができないようなことであつたら、今を「幸せ」とは言えなくなってしまいます。幸せのための努力が今を不幸にするのでは、本末転倒と言わざるを得ません。

しかし、なりたい自分に向かって、あなた自身がこうすると決めたならどうでしょう。決めたことを続けて頑張れたという人もきっといるはず。同じ事をして、やらされることと、自分で決めてやることでは、その感じ方に大きな違いが生まれます。あなたの中に、こうなりたい、こうしたいという思いがあれば、そこに向けての準備も着実にできるのです。

今度は、「自分の思い」を排除した生き方をしたらと仮定して考えてみましょう。AIが今以上に発達し、的確な答えをくれる相談相手となった未来を想像してください。そこであなたは、生活の様々な事や人生の中での大きな事柄を質問し、疑

うこともせず、その答え通りに選択をして、見事、周りから「幸せ」と呼ばれる人生を歩んだとしましょう。人生の最後の最後に、果たしてあなたは、本当に「幸せな人生だった」と思うのでしょうか。

僕には、そう思えるとは到底考えられません。その理由は、「幸せな人生」というものは、具体的な「形」があるのではなく、その判断には、「自分の思い」が大きく関わるからです。だから、どんなに周りの人から見て成功者だと思われたとしても、自分は不幸だと思う人もいるし、またその逆もあります。「幸せな人生」とは、その過程や結果に、自分が納得するかどうかで決まるものなのです。あなたは、誰かに決めてもらった人生で納得できますか。答えは、否でしょう。それを、「幸せ」と感じられるはずがないのです。

このように「幸せ」をめざして生きるとき、「自分の思い」をしっかりもつということが、本当に大事だと分かります。「幸せな人生」へのパスポートだと言っては、言い過ぎでしょうか。「自志貫徹」の、自分の志・思いが自分の中で明確であればあるほど、あなたの生き方は「幸せ」に向かっていくのです。

みなさん、「自分の思い」をもとに、人生という名のキャンバスに、自分の好きな色で、自分の好きな形で、自分の好きなものを好きなように描いてください。その絵は、誰かが見て上手いね、素敵だねと言ってもらえる絵でなくてよいはずですよ。誰かに、そこはこうしなよと指図されるものでも全くないですよ。もし、間違っと思ったら、自分で考えて決めて、塗りつぶしてまた一から塗り直せばいいのです。だって、その絵の「正解」は、あなたのあなただけのあなたにしか分からない「正解」なのですから。

前述のうれしい言葉をくださった保護者の方が、「子どもの人生と私の人生は別なんですよね。」とおっしゃっていました。この「感覚」、とっても大切なのです。子どもは、自分自身の人生を歩みます。嫌な思いや苦しい思いをしながらも、自分で考えて判断して行動していかねばなりません。子どもにとっての「幸せ」と保護者の皆さんの「幸せ」は同じはありますがありません。だから僕らは、人生を同じように生きる先輩として、「伴走者」に徹して、一緒に歩くことしかできないのです。

子どもは、親の所有物でも、自分の思い通りになる支配物でもありません。親は自分の人生を充実させ、その姿を見せることと、彼らの人生を見守ることだけが役目だと、肝に銘じたいものです。